臨床実習について

この冊子を手にしている学生諸君は、共用試験（CBT および OSCE）に合格し、全国医学部長病院長会議が発行した Student Doctor 証を授与されている。

今までは机上の知識習得、バーチャル状況下の技能修得であったが、これからはクリニカル･クラークシップ（ＣＣＳ）として実際に患者さんに接することになる。実習では、講義を受けるという受動的な学習から、チーム医療の一員として能動的、積極的に学び取るという姿勢と行動が要求される。問題解決を目指した学習、即ち患者さんから問題点を収集し、プロブレム・リストを作成し、これを分析統合して診断を導き出し、治療計画を立てるという訓練を毎日積むことになる。

また、指導医のもとで学生の医療行為への参加が認められており、従って強い責任感と積極性が要求される。患者さんは身体の苦痛のみならず、精神的な苦痛も有している。中には予後不良の方もいる。そのような患者さんの協力を得て問診の取り方、患者さんへの接し方を教わることになる。そこでは病める人の心情に対する理解と思いやりが何よりも大切である。

毎日、ベッドへ行き患者さんの状態を観察し、バイタルサインをとり指導医に報告する習慣をつけなければならない。その上で画像を見て、顕微鏡、血液検査などを見て、指導医に質問をし、共に行動することが、基本的な知識、技能を身体にたたき込むまたとない機会となる。近年の医師国家試験において、特に臨床の場でしか学べないような、医師としての基本的な知識、技能に関する出題が年々増えている。この一年間は決して机上の知識習得に終始してはならない。患者さんと密にふれあい、患者さんから積極的に学び、そして良医（良き医療人・社会人）に成長することが、臨床実習に協力して頂いた患者さんに対する最大の恩返しとなるであろう。

臨床実習が学生諸君にとって実り多いものになることを切に願う。

令和５年４月
医　学　部　長